発達障害に「似て非なる」大人たち

～いわゆる「グレーゾーン」を考える～

期　　日：2020年 1月18日（土）・19日（日）
受講対象：教諭、養護教諭、保護者、学校関係者、保育、相談に関わる方、および関連の専門家、又は、これらの専門家を目指す方
定　　員：80名（定員になり次第締切りますのでホームページなどでご確認ください）
受 講 料：13,000円（税込み）　　※昼食は各自おとりください
主　　催：公益財団法人　明治安田こころの健康財団　　TEL 03-3986-7021
会　　場：明治安田こころの健康財団　講義室　　※詳細地図は受講証に添付します
東京都豊島区高田３-１９-１０
（ＪＲ山手線、西武新宿線、東京メトロ東西線「高田馬場駅」下車徒歩約７分）

＊日本臨床心理士資格認定協会「短期研修機会（ワークショップ）」
承認番号:W29111
承認期間:2017年7月1日～2022年6月30日

「発達障害」はすっかり一般的になりました。なにがしかの困り感をかかえている人たちが、この言葉をきっかけに私たちの臨床現場に救いを求めて訪れてきます。しかし私たちの印象では、その半数以上は違うという診断になります。「グレーゾーン」という言葉も良く聞くようになりました。過剰診断といえばそれまでですが、そうなるにはそれなりの背景があるのではないかというのが、今回の講座の趣旨になります。

発達障害のルーツは幼児期から独特の行動様式をもつ自閉症にあります。重い知的障害を伴うことも多く、彼らの精神内界は推測するしかないことから、その解釈を巡ってさまざまな仮説が浮かんでは消えていきました。いわばそのルーツからして障害の本質が見えていないような気がします。一方で幼児期には気づかれず、大人になってから社会に順応できない、知的には平均以上である発達障害者が少なくないこともわかってきました。この場合には、社交不安や適応障害などとの異同が問題になります。本質がわかっていない上に、障害の境界線も不明瞭というわけです。「グレーゾーン」ではなく、全体がグレーのまま、臨床現場が混乱しているというべきかもしれません。

本講座では、ニューロンから自閉症を考える、高次脳機能障害とは何かという視点で見直す、そして臨床現場で「境界例」を考えてみることから、過剰診断問題を掘り下げていく機会にしたいと思います。出席の皆さまもそれぞれの経験をもとに、討論に加わっていただければと思います。　　【企画講師／加藤　進昌】

【プログラム】

日程	時　間	テ　ー　マ	講　師（敬称略）
1月18日（土）	13:00～14:00	発達障害のコアな障害は何か ～社会性の障害ではわからない～	昭和大学発達障害医療研究所　所長 公益財団法人神経研究所附属晴和病院 理事長　加藤　進昌
	14:15～15:15	脳内の自己ニューロンと他者ニューロンから自閉スペクトラム症を考える	自然科学研究機構生理学研究所　教授 磯田　昌岐
	15:30～16:30	高次脳機能障害と発達障害	公益財団法人神経研究所附属晴和病院 医師　丹治　和世
	16:30～17:00	質疑応答	司会：加藤進昌／出席講師
1月19日（日）	9:00～ 9:30	発達障害の過剰診断を克服するには	（前　　掲） 加藤　進昌
	9:45～10:45	発達障害の検査入院から過剰診断を考える	公益財団法人神経研究所附属晴和病院 臨床心理士・公認心理師　川嶋　真紀子
	11:00～12:00	パーソナリティ障害と発達障害	千歳烏山メンタルクリニック　院長 平　幸司
	12:00～13:00	*昼　食　（各自おとりください）*	
	13:00～15:20 （適宜休憩）	ワークショップ （プログラムに参加して ／就労を通して当事者から）	昭和大学附属烏山病院　精神保健福祉士 五十嵐　美紀・横井　英樹 昭和大学発達障害医療研究所　作業療法士 水野　健 デイケアプログラム　参加者
	15:30～16:00	全体討論	司会：加藤進昌／出席講師

※時間割・テーマ等が変更となる場合があります。予めご了承ください。